ソーシャル・ワーカー論

——哲学的基盤を求めて——

松　井　二　郎

1　　はじめに
2　ソーシャル・ワーカーの行動スタイル
3　ソーシャル・ワーク実践の哲学的基盤
4　　結
〈附，翻訳〉
パウル・ティリッヒ，「ソーシャル・ワークの哲学」

"精神治療も教育も，人格的に相手に向いあいながら同時に距離を保つことを心得ている人間によってのみおこなわれ得るのである"

マルティン・ブーバー

"精神分析的な事柄がどんなに洗練されたとしても，他者の中の内的自己との交わりという一点をもたなければ，すべての方法は結局，役立ちません"

パウル・ティリッヒ

1　はじめに

ソーシャル・ワーク実践とは何か，という問いの重要性にもかかわらず，この問いにたいして明快な，満足のいく理論的説明を行うことは決して容易なことではない。筆者は別の機会に，「ソーシャル・ワーク実践の共通基盤を求めて」と題して，不十分ながらこの問いにたいする応答を試みた。(1)

本論においてはさらに一歩進めて，ソーシャル・ワーク実践におけるソーシャル・ワーカーの態度的要因の重要性について考察を試みたいと思う。それではなぜ，ソーシャル・ワーク実践においてソーシャル・ワーカー（以下，ワーカーと略す）の態度的要因の重要性が改めて強調され，また立入った検討がなされなければならないのであろうか。筆者は，ワーカーの態度的要因の重要性はソーシャル・ワーク実践の特質と密接にかかわっていると考える。以下，ソーシャル・ワーク実践についての筆者の考えを要約しておきたい。

ソーシャル・ワーク実践とは人々が生活課題に遭遇し，課題を達成することが困難な場合，(1) 人々の対抗能力を高めることによって，(2) 人々を社会的諸資源に結びつけることによって，(3) 社会的諸資源を改善・整備することによって，人々と人々をとりまく環境システムとの交互作用の場に対抗的相補性の回復・増進を図り，人々が課題を自律的に達成しうるように援助する活動である。

上述の定式化に見られるように，ソーシャル・ワーク実践とは人々が課題（発達課題，状況課題，普遍的課題）を自律的に達成しうるように，人々の対抗能力と環境システムとのあいだの対抗的相補性に視点を向けた，ワーカーによる専門的介入活動に外ならない。

ところで上述のような意味でのソーシャル・ワーク実践は，人間を対象とするところの実践であることから，ソーシャル・ワーク実践はワーカーと課題に遭遇している人々との間の関係（relationship）を媒介としてなされることは改めて言うまでもない。ここで重要なことは，ワーカーと課題を担う人々との間の関係は，一体，どのような質をともなうものではなければならないか，という問題である。筆者は，ソーシャル・ワーク実践において基本となる関係とは，人々に成長・発達を促すような，課題達成のための新たな社会的学習を促すような関係として理解したい。言葉をかえれば，ソーシャル・ワーク実践における専門的関係とは，成長および社会的学習を阻害するような条件が相対的にとりのぞかれている関係と考える。

さて，ソーシャル・ワーク実践が関係—成長・発達を促すような，また課題達成のための新たな学習を促すような関係—を媒介として展開されるところに特質を見出すことができるとすれば，ワーカーの態度的要因はワーカーの所有する知識，技術と同等に，時にはそれ以上に重要な位置を占めているといえるのではなかろうか。なぜなら，ソーシャル・ワーク実践における上述のような対人的援助関係の質は，多かれ少なかれ，ワーカーの態度的要因に依存しているからである。

この小論においては以下，対人的援助関係の質を規定するところのワーカーの態度的要因について検討を加えると共に，それとの関連においてワーカーの態度を根底から支えるところの哲学的基盤について言及したいと思う。本論においてこれから検討を加えようとしている問題，およびその背景となる問題意識は，ソーシャル・ワーク実践の方法のひとつであるケースワークの分野において，またカウンセリングの分野においてたびたびとりあげられてきたものであり，その意味で何らの目新しさはない。[2] 強いて何らかの意義があるとすれば，ワーカーの態度的要因をやや分析的に説明しようとしている点に，また哲学的基盤としてパウル・ティリッヒ（Paul Tillich）の論文，「ソーシャル・ワークの哲学」（"The Philosophy of Social Work"）をとりあげ，若干の考察を試みようとしている点に求められるにすぎない。このようにこの小論それ自体には目新しさはなく，したがって既存の研究にたいして独自の貢献は期待しえないとしても，ソーシャル・ワーク実践におけるワーカーの態度的要因の重要性，またワーカーのよって立つ哲学的基盤の必要性をいまいちど確認することは，この問題のもつ意義を考えればあながち無意味とはいえない。[3]

註

(1) 松井二郎，「ソーシャル・ワーク実践の共通基盤を求めて」，『北星論集14号』。

(2) 例えば，Felix Biestek, *The Casework Relationship* (Loyola University Press, 1957). Compton & Galaway, *Social Work Practice* (The Dorsey Press, 1975), 特に chapter 3, chapter 4 (pp. 102～191). Clemmont E. Vontress, "The Existential Casework Relationship." *Social Casework*, vol. 50, No. 2 (Feburary 1969). Carl Rogers の一連の著作，例えば『人間関係論』(『ロージァズ全集第6巻』，岩崎学術出版社)。

(3) 社会福祉教育は知識，理論の伝達のみならず，ソーシャル・ワーカーのよって

立つ哲学，価値，またワーカーとして必要な態度的要因等を視野の中に入れなければならないと思う。しかし現状はどうかといえば，著しく知識の伝達に偏重しているのではなかろうか。本稿は，福祉教育におけるこのようなアンバランスを是正するためのささやかな試みといえる。

2 ソーシャル・ワーカーの行動スタイル

ソーシャル・ワーク理論の最近の動向において注目すべきひとつの動きは，ソーシャル・ワーク実践におけるワーカーの行動スタイル（style）[1]の重要性に関心が向けられている点であろう。これらの問題を取りあげている最近の文献，論文のいくつかをあげれば，Pincus & Minahan, *Social Work Practice: Model and Method* (1973), とりわけ H. Goldstein, *Social Work Practice: A Unitary Approach* (1973) が注目されよう。[2] また H. Goldstein の上記の文献においても引用されているいくつかの論文，例えば Schmidt, Mullen, Taber & Vattano 等の研究も見落せない。[3]

これらの諸研究の示唆するものは何か。これらの一連の研究は，実践の過程においてワーカーは単なる技術の操作者（manupulator of techniques）では決してなく，ワーカーの個人的諸特性の影響がきわめて大きく作用するという事実を示唆している。いいかえれば，ワーカーの個人的－技術的諸特性の複合としてのワーカーの行動スタイルの重要性に関心が向けられているといえよう。ソーシャル・ワーク実践におけるワーカーの行動スタイルの重要性に関するこのような指摘は，ソーシャル・ワーク実践の性格を考えれば，むしろ当然のこととともいえる。すなわち，ソーシャル・ワーク実践の一般的目的を，課題達成のための新たな社会的学習を極大化するような社会的－心理的コンテキストの提供ということに求めるとすれば，ソーシャル・ワーク実践の目的の達成は，人々とワーカーとのあいだの援助的関係を媒介とするところの，ワーカーの影響力（influence）と深いかかわりをもつといわざるをえないからである。ここでいうワーカーの影響力とは，強制ないし命令を用いることなくある一定の効果を生ぜしめるワーカーの力を意味している。[4] ところでこのようなワーカーの影響力は，ワーカーの所有する知識，技術それ

自体から生れるのではなく，知識，技術と同時にワーカーの態度的諸要因—その複合としてのワーカーの行動スタイル—から生れるものである。このように，ソーシャル・ワーク実践においてワーカーの行動スタイルが重要な位置を占めるとすれば，ワーカーの行動スタイルとは具体的にどのようなことを意味するだろうか。以下，H. Goldstein の所論[5]を手がかりに考察を進めてみよう。

Goldstein はワーカーの行動スタイルを構成している諸変数として，「観察する自己」(observing self)，「感覚」(sentience)，「役割」(role)の3つを分析的に抽出する。むろん，これらの諸変数は実際には切り離しがたく結びつき，ひとつのシステムを構成していることは言うまでもない。以下，それぞれの変数について簡単に見てみよう。

まず第1の変数である「観察する自己」とは，ワーカーが自己をとりまく現実界をどのように認識し，構成しているか，といった個々人の認知的側面（cognitive aspects）を指している[6]。そしてこのような認知的側面の構成要因として，① 体質的要因（constitutional factors），② 人生経験（life experience），③ 教育経験（educational experience），④ 哲学（philosophy）の4つをあげることができよう。

まず体質的要因とは，ワーカーの知的水準，およびワーカーの活動力や神経的構造といった生理学的特質を指し，これらの諸特質はワーカーの抽象能力，ワーカーの活力，活潑さ，平静さといった態度に密接なかかわりをもつ。またワーカーのこれまでの人生経験，教育経験の幅，拡がり，豊かさといった要因も，ワーカーが現実界にたいして選択的に認識し，理解する仕方に影響を及ぼすものとして重視されなければならない。最後に，ワーカーの抱いている哲学は，とりわけ重要な位置を占める。ここでいう哲学とは，ワーカーの基本的態度，信念，価値を包括した概念であるが，このような意味での哲学は，ワーカーの“自己”(self)を形作っているといってよい。ワーカーは自らの抱いている哲学を常に自覚しているとは限らない。しかしソーシャル・ワーク実践の展開過程において，ワーカーの基本的態度，信念，価値は実践の目標設定，目標達成のための手段の選択等に影響を及ぼす重要な要因であり，またワーカーは援助関係を媒介として，自己の基本的態度，信念，価値を伝達し

たり，他者と相互交流をしながら，他者の基本的態度，信念，価値の変容や行動の変容に働きかけているという側面を見落せない。以上のことから，ワーカーの基本的態度，信念，価値が実践過程において重要な影響を与えることが理解されよう。

ソーシャル・ワーカーの行動スタイルを構成する第2の変数は，「感覚的特徴」(sentient characteristics) と呼ばれるものである。ここでいう感覚的特徴とは，現実界にたいするワーカーの知覚の仕方，感じ方，関連づけ方，反応の仕方等に影響を及ぼす情緒的，反応的な諸特徴を指し，ワーカーの感得・感覚能力ともいえる。このような意味での感覚的特徴を具体的にあげれば，① 感受性(sensitivity)，② 感情移入 (empathy)，③ 直観 (intuition)，④ 受容 (acceptance)，⑤ コミットメント (commitment)，といった諸能力を指す。以下，感覚的諸特徴のそれぞれについて簡単に見てみよう。(7)

感受性とは，他者が感じ，話し，行動することをあらかじめ予測する能力，ないしは他者の内的状態への洞察力をいう。

感情移入とは，他者の内的世界の私的な個人的意味を，自分自身のもののように感じながら，決して ～ のようなという性質を失わないようにすることを意味する。感受性が他者の内的状態を知る能力を指すのにたいし，感情移入は他者の感じ方，経験の中に自己をおき，あたかも自分自身のもののように感じることを指すといえる。

次に直観について見てみよう。一般的に必要とされる情報よりもふたしかな情報にもとづいて一定の結論に到達した時，そこに直観が生じたという。

受容とは，他者の抱く価値，欲求，目的にたいする深い洞察を通して，ひとりひとりの価値，欲求，目的を他の人々とは異なる独自なものとして個別化していく過程を意味する。

コミットメントとは，個人的な安全を犠牲にしても他者に関与していくこと，および返礼や報酬を期待することなく他者を援助しようとする意志をいう。コミットメントが献身 (dedication) と異なるのは，献身が他者の意向を度外視した一方向的な働きかけであるのにたいし，コミットメントは他者と“共に”(with) という性格をもつ。

以上，ワーカーの行動スタイルを構成している感覚的特徴の諸要因について簡単に見てきたが，ワーカーの感覚的諸特徴は前述のワーカーの認知的側面と相互に関連しあいながら，ワーカーの行動スタイルに，ひいては実践過程に影響を与える重要な変数であるといわねばならない。

さて，これまでワーカーの行動スタイルを構成する2つの変数，すなわち「観察する自己」と「感覚的特徴」について概観してきたが，これら2つの変数は実践過程において人間的なこまやかさや質を与えるものとして重要であることが強調されなければならない。しかし他面，これらの2変数のみではワーカーの専門的性格の全体を説明することにはならず，残されたいまひとつの変数である「役割特徴」(role characteristics)に関連づけられて始めて，ソーシャル・ワーカーの行動スタイルが明らかとなる。

それでは第3の変数であるワーカーの「役割特徴」について見てみよう。ところでワーカーの役割特徴については従来，必ずしも共通した認識があったとはいえない。むしろ従来においては，ワーカーの役割はワーカーの所属する施設・機関ごとに断片化，タコツボ化し，施設という特殊性をこえた，ワーカーの役割の一般的性格が曖昧にされてきたといえる。したがって以下においてワーカーの役割を考察するに際しては，ワーカーが所属する施設から期待される役割，また施設・機関におけるワーカーの占める部署，地位から生ずる役割のみならず，施設・機関の制約をこえた，一般化された意味での専門的役割をも包括した形で検討する必要があるといえよう。

それではワーカーの役割とは何か。Goldstein は ① 権威の役割 (the role of authority)，② 社会化の役割 (socializing role)，③ 教育的役割 (the teaching role) の3つをあげている。(8)

まず権威の役割とは，ワーカーが特定の施設・機関の中に一定の権限が附与された部署，地位を占めることによって，またワーカーは諸サービスに関する処分権を所有していることによって，さらにワーカーは問題解決のために必要な知識，情報，技術を所有していることによって，もたらされる役割ともいうべきものである。このことから明らかのように，ワーカーと援助を求めている人々との関係は，権限，権威という意

味では決して対等な関係にあるのではなく，ワーカーは実践過程において何程かの権限，権威を行使しうるという意味において不平等関係の中にあるのである。ところでワーカーの権限，権威の行使，すなわち権威の役割それ自体は善でも悪でもないが，その行使の仕方によっては善でも悪にもなりうる両刃の剣である。ワーカーが権威の役割にたいしてどの程度，自覚的であり，かつコントロールしながら建設的に行使しうるかによって，ワーカーの行動スタイルは大きく影響をうけるであろう。

次の「社会化の役割」,「教育的役割」は，ワーカーの一般的な役割ともいうべきものである。以下においてはとりわけ重要と思われる教育的役割のみをとりあげ[9]，筆者の見解をまじえながら見ていくことにしたい。すでに見たように，ソーシャル・ワーク実践の目的を，人々が課題（発達課題，状況課題，普遍的課題）を自律的に達成すること，ないしは課題達成のための新たな社会的学習が極大化されうるような社会的－心理的コンテキストを提供すること，に求めるならば，ソーシャル・ワーク実践とはひとつの問題解決過程に外ならず，ワーカーの専門的役割も人間の問題解決の戦略（man's problem-solving strategy）に関連づけて説明することができる。以下，ワーカーの教育的役割を具体的にあげるならば[10]，

① 情報の提供（providing information）：人々が課題の達成に成功するか否かは，課題についての知識，および状況，クライエント自身，社会諸資源，特定の状況下における適切な行動，課題解決に必要なステップ等についての適切な情報に依存する。ワーカーは必要に応じてこれらの知識，情報を提供しなければならない。

② 試行錯誤の学習機会の提供（providing opportunities for trial-and-error learning）：人々が課題解決のために新たな学習を試みたり，それた評価することが可能なような面接場面，集団を設定すること。

③ 教育，ガイダンス（providing instruction and guidance）：課題解決の過程において行動の選択肢の中で最も効果的なものを明らかにし，合理的な選択が可能なようにガイダンスすること。

④ 自分自身で行動するように勇気づけること（encouraging self-initiated behavior）：適切な情報が与えられ，また行動の選択時の中か

ら適切な行動が選ばれても，具体的な行動へ自ら発動できない場合，課題は達成されない。そのような場合，ワーカーは人々が自らの力で行動できるように勇気づけなければならない。

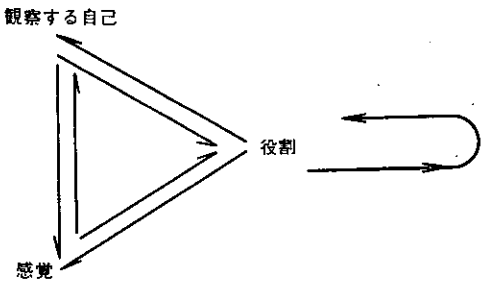
⑤ 不協和音を減少させること（reducing dissonance）：課題解決過程を阻害している不安，アンビバレンス等を減少，除去すること。

⑥ 価値の学習を促進すること（promoting value learning）：課題解決のための学習は何らかの価値の変容，新たな価値の同化を伴う。ワーカーは人々が価値選択の幅を拡げたり，新たな価値への同化を促進しなければならない。

⑦ 学習の転移を促進すること（promoting transfer of learning）：獲得した問題解決の方法を他の問題へ応用できるようにすること，般化すること。

以上，ワーカーの教育的役割について簡単に見てきた。ワーカーが上述したような役割をどの程度，認知し，また役割をどのように遂行しているかによって，ワーカーの行動スタイルは大きく影響を受けるであろう。

さて，ワーカーの行動スタイルを「観察する自己」，「感覚的特徴」，「役割特徴」の3つの変数に分け，それぞれの変数について説明してきたが，以下においてはこれら3つの変数の関係について見ておきたい。いうまでもなく，これら3つの変数は交互に作用しあっているひとつのシステム（system）として考えねばならない。そしてこれらの3つの変数の交互作用の比較的に安定した，多少とも持続的なパターンがワーカーの行動スタイルを具体的に形作っているといえる。いまひとつ重要なことは，これらの交互作用しあう3つの変数から成るシステム（行動スタイル）は閉じたシステム（closed system）ではなく，開放システム（open system）である点である。すなわちこれら3つの変数からなるシステムとしての行動スタイルは，その外部環境と交互作用しあい，さらには交互作用を媒介としてシステムの内部の交互作用のパターンを修正，変更していくところの，フィードバックのメカニズムを備えたオープン・システムとしての特徴をもつ。以上の3つの変数の関係をダイアグラムで表現すると次のようになる。(11)



コミュニケーションのフィードバック・システム

註

(1) 本稿でたびたび使用している「行動スタイル」なる用語は，style の訳語として筆者があてたものである。

(2) Pincus & Minahan, *Social Work Practice: Model and Method* (F. E. Peacock Pub. Inc. 1973), pp, 83～84. Howard Goldstein, *Social Work Practice: A Unitary Approach* (Univ. of South Carolina Press. 1973), pp. 56～104. Pincus & Minahan の論文においてもワーカーの行動スタイルの重要性について言及されてはいるが，Goldstein にくらべればごく簡単な言及にとどまり，掘り下げが不十分である。したがって，本稿においては Goldstein の論文を中心に考察することになる。

(3) J. Schmidt, "The Use of Purpose in Casework," *Social Work*, No. 1 (1969). E. J. Mullen, "Differences in Worker Style in Casework," *Social Casework*, No. 6 (1969). Taber & Vattano, "Clinical and Social Orientations in Social Work; An Empirical Study," *Social Service Review*, No. 1 (1970).

(4) H. Goldstein, *Social Work Practice: A Unitary Approach.* p. 15.

(5) H. Goldstein, 同上. pp. 14～17 および pp. 56～104.

(6) H. Goldstein, 同上. pp. 62～66.

(7) H. Goldstein, 同上. pp. 66～75.

(8) H. Goldstein, 同上. pp. 75～104.

(9) 本稿では「教育的役割」についてのみとりあげ，「社会化の役割」については省略している。Goldstein のいう「社会化の役割」とは，ソーシャル・ワーク実践の過程においてなされるワーカーとクライエントとの間の価値の伝達，交換のプロセスを指す。ソーシャル・ワーク実践においてワーカーの「社会化の役割」が重要なのは何故か。Goldstein によれば，ソーシャル・ワーク実践の目的は（課題解決のための）社会的学習の改善が極大化されうるような可能性をもった社会的—心理的コンテキストを提供することに求められた。ところで社会的学習と

は，行動の何らかの変容を意味するが，行動の変容は行動の構成要素のひとつである価値の変容を必要とする。「社会化の役割」とは，行動の変容のために必要な，価値の変容に向けられたワーカーの役割ともいうべきものであり，「教育的役割」と並んでワーカーの重要な役割といえる。Goldstein, pp. 88～100.

(10) H. Goldstein, 同上. pp. 100～103.

(11) H. Goldstein, 同上. p. 60

3 ソーシャル・ワーク実践の哲学的基盤

これまでの考察から，実践において重要な意味をもつワーカーの行動スタイルは3つの変数から成り，これら3つの変数の交互作用の比較的安定した，また多少とも持続的なパターンがワーカーの行動スタイルを形作っていることが明らかとなった。そしていまひとつの重要な点は，これら3つの変数間の交互作用のパターンは構造と呼ぶべきものであり，比較的に変化しにくい性質をもちながらも，決して固定なものと考えるべきではなく，他者とのコミュニケーションのフィードバックによって交互作用のパターンも変化しうるということである。

以上のことから，ワーカーによって3つの変数や，変数間の交互作用のパターン，他者とのコミュニケーションによるパターンの変容の度合い，はそれぞれ異なりうる。それゆえ，ひとりひとりのワーカーはそれぞれ独自な行動スタイルをもつといえる。

しかしここで注意すべきことは，ワーカーの行動スタイルはひとりひとりそれぞれ独自性をもつとはいえ，3つの変数の中の「役割特徴」は，ワーカーの所属する特定の施設・機関の特殊性の規定をうけるだけではなく，それを超えた共通性，共通基盤を共有するものでなければならないという点である。むろんここでいう共通性ないし共通基盤とは，どの専門分野のワーカーも，またどの施設・機関のワーカーも画一的な，同一の役割をもつという意味ではなく，専門分野および施設・機関の差異によって役割は異なりながらも，なおかつ核ともいうべき共通基盤の存在を指している。しかし従来においては，ソーシャル・ワーク実践の共通基盤は明確化されるにいたらず，曖昧，不鮮明の状態におかれてきたために，ワーカーの役割の共通基盤も不鮮明とならざるをえず，専門分

野ごとに，あるいは個々の施設・機関ごとに断片化，タコツボ化し，さらに極論すればひとりひとりのワーカーの行動スタイルの中に吸収されてしまうという傾向があったことは否定しえない。したがって専門分野や自己の所属する施設・機関における役割の差異性をも視野の中に入れながら，役割の共通性，共通基盤を明確にすることが何よりも重要な課題といえよう。

ソーシャル・ワーカーは，上述のようなワーカーとしての役割を自己の行動スタイルの中核としながら，さらにそれをワーカー自身の人間的なこまやかさや質でつつみこまなければならない。もしワーカーが自己の役割を遂行する際に，そこにワーカー自身の人間的なこまやかさや質がともなわなければ，果してワーカーは役割を効果的に遂行することができるであろうか。その意味で両者は相互依存的な関係にあるといわねばならない。したがって，ワーカーの行動スタイル，すなわち3つの変数の交互作用のパターンのあり方として，役割の遂行において人間的なこまやかさ，質を伴うところの，そういったワーカーの行動スタイルが何よりも大切ではなかろうか。

それでは一体，役割遂行に質を与えるところの人間的なこまやかさとはどのようなことを意味するのだろうか。この問いに答えるためには，人間的なこまやかさ，質と密接にかかわるところの2つの変数，すなわち「観察する自己」，「感覚的特徴」のそれぞれについて立入った考察を必要とする。しかしこれら2つの変数についての検討は別の機会にゆずり，本論においては2つの変数とかかわりをもつところの，ワーカーの哲学的基盤について考察してみたいと思う。筆者はこの点に関して，パウル・ティリッヒの「ソーシャル・ワークの哲学」(Paul Tillich, "The Philosophy of Social Work") から学ぶことが多々あると思う。(1) ティリッヒの上記の論文は，実践において人間的なこまやかさ，質を与えるところの，ワーカーのよって立つ哲学，ないしは倫理的原則を考察したものとして重要な意義をもつと考える。それではティリッヒの主張するところの，ワーカーのよって立つ哲学的基盤とは何か。

ティリッヒはソーシャル・ワーカーの陥りやすい危険性，誘惑について次のようにいう。すなわち，ワーカーは人々と出会うなかで，人々を

ケア（care）するのではなくいつしか支配（control）しようとしたり，傾聴する（listen）のではなく逆に押しつけたり，またワーカーは人々にたいして内発的に応答することにかえて機械的にふるまったり，またワーカーは他者を認識する際に他者の独自性を見失い，他者を客体として，また方向づけたり，管理する物として扱うという危険性，誘惑がそれである。ティリッヒが警告するワーカーのこのような態度――行動スタイル――に見られる危険性，誘惑は，人間性の内に潜む誘惑であると同時に，ワーカーをとりまく環境的・構造的要因によって今後ますます増大するところの危険性，誘惑ではなかろうか。ここでいう環境的，構造的要因とは，ワーカーが所属する施設・機関の官僚制化という現象に外ならない。ではなぜ，施設・機関の官僚制化は，ティリッヒが警告するようなワーカーの態度――行動スタイル――を助長することになるのであろうか。このことを理解するためには，官僚制（bureaucracy）についての最小限の説明を必要とする。以下，この点について簡単に見ておきたい。

社会福祉施設・機関の官僚制化という時，施設・機関が次のような諸特徴を帯びることを意味するといってよい。すなわち，① 一定の規則－法律，行政規則，服務規定等－にもとづいて，それぞれの職務と権限を定められた部署（例えば施設長，指導員，保母，寮母，事務員等）が与えられ，② 規則にもとづいて配分された部署はピラミッド型の構造に配列（例えば施設長－事務長－指導課長－指導員－主任保母）され，③ 各部署には原則としてそれぞれ長期にわたる教育を受け，専門資格を取得した人（例えば社会福祉主事，指導員，福祉司，保母等の任用資格を取得した人）が配分され，④ 仕事は私生活から厳格に区別された，そして仕事を遂行するうえに必要な用具や設備をそなえた事務所（施設）においてなされ，⑤ 仕事の処理はピラミッド型の単一支配的な指揮，命令系統を通して下りてくる命令，規則にしたがってなされる，といった諸特徴がそれである。

このような諸特徴を福祉施設にあてはめてみた場合，現実の福祉施設は多かれ少なかれ官僚制としての特徴をもっているといえよう。ところで官僚制は「民主主義の随伴現象」[2]（M. ウェーバー）といわれるよう

に，積極的な諸帰結をもたらしたことは事実であるが，他面，官僚制はその基盤を確立すると共に上述のような積極的な側面を逆に否定するような問題性が顕在化してきたことも事実であった。それでは官僚制の問題とは何か。

いうまでもなく官僚制は，それがうまく運営されるためには規則によって定められた行為形式に人々が合致し，各人の行為の信頼性が高くなくてはならない。したがって，官僚制においては「規制」，「規律」の遵守への圧力が強く加えられる結果，もともと規則，規律を守ることが目標を達成するための手段だと考えられていたものが，いつしかそれ自体，自己目標となるという「目標の転移」や「規律，規則への同調過剰」（R. マートン）という現象が起ることになる。(3)

いまひとつ重要なことは，官僚制はその成員をそれぞれの部署に拘束し，成員の関心を彼等の職務，上司にとじこめる方向に作用する。その結果，人々は組織全体の目標を見失い，個々の職務を全体的な関連の中でその意味を問いかえすといった主体的能力を徐々に喪失していく危険性がつきまとう。「精神なき専門人」（M. ウェーバー），「所与の状況の下で出来事の相関関係をみずから洞察し，知的に行動する能力の喪失」（K. マンハイム）という問題状況がそれである。(4)

今日，ソーシャル・ワーカーは官僚制としての福祉施設に所属することによって，上述のような問題状況に多かれ少なかれ直面しているといえる。そして今後，社会福祉制度の官僚制化の肥大化にともなって，上述のような問題状況はますますあらわとなるのではなかろうか。その結果，ティリッヒもいうように，ワーカーは他者を独自性においてではなく，もっぱら他者との類似性，同一性において認識し，他者を客体として，また方向づけたり管理する客体として扱ってしまうという危険性，さらにまた，ケアをいつしか支配に変質させ，傾聴ではなく押しつけに，内発的な応答ではなく機械的なふるまいに，といった官僚制的行動スタイルへの誘惑にますますさらされることになる。このような危険性とは，M. ブーバーのいう「人間の関係能力（Beziehungskraft）の低下」(5)に外ならず，汝を対象物への呪縛し，汝をそれの世界のなかに閉じこめ，我と汝の出会いの関係を我とそれとの関係に変質させてしまうと

ころの傾向性を意味しているといってよい。

ワーカーは日々の実践の中で，ティリッヒ，ブーバーのいうような危険性，誘惑をもたらす状況におかれているとすれば，ワーカーは知らず知らずのうちにそのような行動スタイルにならないという保証はない。ワーカーの陥りやすい危険性，誘惑に歯止めをし，あるいはすでにそのような誘惑に陥っている自分自身に気づくためには，ワーカーはソーシャル・ワーク実践の目的，いいかえればワーカーとしての役割を常に明瞭に自覚していると同時に，実践を支える哲学的基盤を深め，かつ想起することが何よりも大切といえよう。

それでは一体，ワーカーは自己のよって立つ哲学をどこに求めればよいか。いうまでもなくこのような問いにたいしては，きわめて抽象的なレベルならともかく，具体的レベルにおいて，かつすべてのワーカーが承認しうるような客観的な答えを与えることは困難がつきまとう。なぜなら，このような問いにたいする応答は，ワーカーひとりひとりの価値判断の領域に属し，ワーカー自身の主体的選択がともなうからに外ならない。このようにワーカーのよって立つ哲学的基盤とは何か，について普遍的命題として答えを与えることは困難であるにせよ，すでに見てきたようなソーシャル・ワーク実践の性格，およびワーカーをとりまく官僚制とそれにともなう誘惑を考えた場合，ワーカーのよって立つ哲学的基盤として，ひとつの基本的方向を共有することは可能ではなかろうか。

ここでいう基本的方向とは，P. ティリッヒのいう傾聴愛（listening love）のもつ重要性に外ならない。ティリッヒのいう傾聴愛とは，それぞれの独自性をもったひとりひとりの諸個人，状況の呼びかけ，声なき声にたいして，敏感に耳をかたむけ，それにたいして内発的に応答するところの，そうしたワーカーの基本的態度を指す。そしてワーカーのこのような基本的態度は，フィリア（*philia*），エロス（*Eros*）といった愛によってではなく，より普遍的なアガペ（*agape*）としての愛によって支えられた態度を意味する。こうした愛によって支えられたワーカーの基本的態度は，支配ではなくケアへ，押しつけるのではなく傾聴へ，機械的にふるまうのではなく内発的な応答へ，とワーカーを導くものである。

傾聴愛と関連していまひとつの重要なことは，ワーカーが他者を理解する仕方にかかわる問題である。ワーカーは実践する際に，他者を正しく理解しなければならないが，ここで強調されなければならないことは，他者の内的自己に関与しながら他者を理解するというワーカーの態度の重要性である。ティリッヒもいうように，ソーシャル・ワーク実践においては距離をおいた，経験的なアプローチにもとづく理解だけでは決して十分ではなく，他者に人格的に関与しながら，他者の内的自己との交わりを通してなされる人間理解が同時に必要なのである。

以上，ワーカーのよって立つ哲学的基盤として傾聴愛ということ，そして他者の内的自己に関与しながら他者を理解することの重要性について述べた。最後にいまいちどワーカーの行動スタイルの問題に立ちかえり，これまでの考察を要約しておきたい。

今日，必要とされるワーカーの行動スタイルとは何か。ワーカーは自己の行動スタイルが官僚制的な行動スタイルへ流されることに抗するためにも，専門的な役割への明確な志向性に裏うちされた，かつ他者の内的自己に関与し，傾聴し，内発的に応答しようとする，そうした人間的なこまやかさ，質をともなった行動スタイルが何よりも必要といえないか。むろん，ワーカーはこのような行動スタイルを日々の実践において常に維持することは，決して容易なことではない。むしろこのような行動スタイルとは逆の官僚制的な行動スタイルへ陥る危険性，誘惑はますます増大しつつあるのが現実であろう。しかしワーカーをとりまく現実がそうであるからこそ，上述のような行動スタイルはますます重要となるのではないか，と筆者は考える。

註

(1) Paul Tillich, "The Philosophy of Social Work," *Social Service Review*, vol. 36. No. 1 (1962). 本稿におけるティリッヒ論文からの引用は，その翻訳を本稿の末尾に掲載しているので，いちいち原文の頁を明記することを省略した。

(2) マックス・ウエーバー，世良晃志郎訳，『支配の社会学Ⅰ』（創文社），pp. 118～120.

(3) ロバート．K．マートン，森　東吾他訳，『社会理論と社会構造』（みすず書房），pp. 179～189.

(4) マックス・ウェーバー，梶山　力，大塚久雄訳，『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫，下巻），pp. 244～247. K．マンハイム，福武　直訳，『変革期における人間と社会』（みすず書房），pp. 60～71.

(5) マルティン・ブーバー，田口義弘訳，『我と汝』（みすず書房），p. 52.

4　結

この小論をしめくくるにあたり，これまで考察してきたことをいまいちど簡単に要約するならば，① ソーシャル・ワーク実践においてワーカーの行動スタイルは重要な位置をしめること，② 行動スタイルは分析的に3つの変数に分けうること，③ 3つの変数は交互作用しあうひとつのシステムであり，3つの変数間の交互作用の比較的に安定したパターンが行動スタイルであること，④ 行動スタイルは比較的に変化しにくい性質を有するが，開放システムであり，外部環境とのコミュニケーションを通して行動スタイルは変化すること，⑤ 変数のひとつである役割は行動スタイルの核をなすものであるが，従来，ワーカーの役割（とりわけその共通基盤）は不鮮明であったこと，⑥ ワーカーの役割に質や人間的なこまやかさを与えるものとして「観察する自己」，「感覚」という変数が重要であること，この2つの変数に関連して，ワーカーのよって立つ哲学基盤を考える上に P. ティリッヒの論文は示唆を与えてくれること，以上の諸点を指摘することができよう。

福祉教育に携わる者として日頃，痛感することのひとつは，現在の福祉教育においてこれまで見てきたような意味での行動スタイルがほとんど問題にされてこなかったのではないか，という点である。これまでソーシャル・ワーカーの態度的要因の重要性がたびたび指摘されながらも，福祉教育のなかで正当な位置づけが与えられないで今日にいたっている背景には，ワーカーの行動スタイルについての分析的な検討が不十分であったことにも起因していると考えられる。この小論においてはワーカーの行動スタイルをやや分析的に考察することを通して，福祉教育の当面する問題への手がかりのささやかな第1歩になればと考えた。

なお，本論においてたびたび言及したパウル・ティリッヒの論文「ソーシャル・ワークの哲学」は，今日においてもきわめて示唆に富む論文であると考える。この機会に，ティリッヒの上記の論文の翻訳を試み，本論の末尾に附論として掲載することにしたい。

《附．翻訳》

ソーシャル・ワークの哲学

パウル・ティリッヒ
松 井 二 郎 訳

* * * * * * * * *

訳 者 ま え が き

この論文の筆者，パウル・ティリッヒ（(Paul Tillich, 1886～1965）は，ラインホールド・ニーバーとならんでアメリカを代表する著名なプロテスタント神学者である。ティリッヒは1933年にヒットラー政権によってフランクフルト大学の教授の職を追われてアメリカに移住し，長くニューヨーク・ユニオン神学校教授，後にハーバード大学神学部教授の職にあって活躍した。このような個人的，時代的背景もあって，彼は移住して間もなく，亡命者のための諸サービスに基金を提供する団体である「中欧難民自助会」(Self-help for Refugees from Central Europe）を創設し，15年間その会長を勤めている。

以下に翻訳するティリッヒの論文「ソーシャル・ワークの哲学」("The Philosophy of Social Work") は，ティリッヒ自身と深いかかわりをもつ「中欧難民自助会」の創立25周年の記念日にティリッヒが講演し，1962年に Social Service Review 誌 (vol. 36, No. 1) に掲載されたものである。P. ティリッヒの生涯，神学の特質等のくわしい紹介については土居真俊，『ティリッヒ』（日本基督教団出版会）を参照されたい。

なお，ティリッヒのこの論文の翻訳は，四国学院大学の久保弘章氏によってなされたことがあるが（「ルガール．第4号」．1970年10月．ルガール社），掲載されたのが同人雑誌という性格から，多くの人々の眼にふれる上に制約があったと思われる。したがってここに改めてティリッヒの論文を翻訳しなおし，紀要論文の一部として掲載することは意義あることと考える。

パウル・ティリッヒの論文翻訳を「北星論集」に掲載するについては，The University of Chicago Press および版権所有者 Robert C. Kimball 氏から快諾が得られた。また論文翻訳に際しては，本学の原田和幸，矢口以文両教授にいろいろと御教示願った。記して感謝したい。

* * * * * * * * *

私は“ソーシャル・ワークの哲学”という主題について話すように要請されました。何人もソーシャル・ワークの普遍的な哲学を示すことはできませんし，またソーシャル・ワークのひとつの哲学であっても，私の能力とここで私に与えられた時間の制約をはるかに超えた企てであります。

私がこれから試みようとしているのは，ソーシャル・ワークのいくつかの倫理的諸原則を明らかにすることですが，これらの倫理的諸原則について深く考え，思いをめぐらすことは，ソーシャル・ワークの仕事の友人にすぎないけれども，自分たちの直面している諸問題のなかに広く人間生活の問題が投影されていることに気づいている私たち，そしてまた，ソーシャル・ワークの仕事に実際に携わっている方々，にとっても恐らく有益でありましょう。

自助会（Selfhelp）の25年間，その小さな始まり，その絶えざる発展，さらなる存続への力をささやかな誇りをもって思いおこします時，私はそこに自らの根のもつ自然の力を超えてまで，決して成長しようと試みない1本の健全な樹を見ます。しかしその樹の枝の下には，多くの国々からやってきた多くの鳥たち，それも驚くほどのさまざまな種類の鳥たちが暫時の避難所を求めました。自助会によるこのような援助は，ソーシャル・ワークの健全な哲学に，自助会のいったんを担って仕事をしている人々の頭のなかのみならず胸に生きつづけている哲学に，何ほどか負っていることは言うまでもありません。

したがって私が今日，“ソーシャル・ワークの哲学”についてお話しすることを承諾しました時，私はソーシャル・ワークの哲学をなにも無いところから展開していく必要はなく，ただ自助会の実際の仕事とこの仕事の背後に横たわる基本的な確信 ── 自助会の25年の歴史の中で発展し，話し合い，変化してきたところの確信 ── に哲学的な解釈を加えるだけでよいのだ，という考えに助けられたわけであります。

すべてのソーシャル・ワークの基盤は，社会の法制化された諸組織の欠陥に根ざしています。社会全体の組織が完全に機能し，社会機構がすべての人間をくまなく包みこんでいるならば，ソーシャル・ワークが存在する余地はありません。しかしそのような機構を想像することは困難であります。完全に機能している組織やすべての人間をくまなく包みこむような機構は，次のような2つの要因によって阻止されます。ひとつの要因は，私たちが今日，哲学的用語で呼ぶところの“人間の実存的窮境”，人間の不完全性，に根ざしています。第2の要因は，人間の実存的性質，すなわちひとりひとりの個人の独自性とひとつひとつの状況の独自性に根ざしています。したがって，たとえすべての人々のために最大限の考慮がくばられたとしても，全体的統制は戦時，平和時のいずれをとわずうまく機能したためしはありませ

んでした。第2次世界大戦中のナチ・ドイツにおける全体主義的統制によってもたらされた混乱は，現在の冷戦下のソビエトロシアにおける食糧配分の混乱に匹敵いたします。どのように秀いでた知性と人格をもった人々でも，このような課題には不適切なのです。たとえこれらの人々が社会の一定部分を占めたとしても，他の部分からの干渉によって，社会組織が完全に機能することは阻止されてしまうでしょう。ヨーロッパ人の移住という自助会がよって立つ事実は，長い間，社会的諸欲求とかかわりをもつ既存の法制化された諸組織の手の届かないところにおかれてきました。自発的になされたソーシャル・ワークが，この当面の問題を解決する唯一の方法であったのであります。

しかしながら，このことは私たちが問題にしようとしている事柄のうちでは小さな方です。もっと重要なことは，社会的諸要求とかかわりをもつ法制化された組織がどんなに良くても，ひとりひとりの個人はそれぞれ独自な問題を体現しているという事実であります。援助を受けたい，という個々人の要求を抑圧する社会においてのみ，この問題を無視することができます。個々の人間のみならず，人と人，あるいは人と集団とが織りなす個々の状況は，いかなる法制化された組織といえどもその手のとどかないところにあるのです。人間の偉大さとは，人間の自由が独自性を意味するところにあります。そして人間の独自性は，人間が人間である限り，人間存在が社会的装置のなかに吸収されてしまうことを断固，阻止します。正にこの理由によって，ソーシャル・ワークとは緊急事業以上のもの ── もし緊急事態ということを，人間状況に常につきまとうものと定義しないのであれば ── であって，このことは恐らく真実であります。

確かに，あらゆるソーシャル・ワークはそれ自身を不必要たらしめるように努めていますし，また多くの形態のソーシャル・ワークはそのようにおこなってきました。そして討議のたびごとに，私たちはしばしば自分たちがすでにその段階に到達しているかどうか自問したものですが，しかしその都度，ソーシャル・ワークの私たちなりのやり方を継続していくことをを必要とする多くの緊急状況を見い出したのでした。

私たちは自助会の創設期におこなったように，状況に傾聴する（listen）ように努めてきました。そして状況に傾聴しながら，私たちはこの世の大法則のひとつ，すなわち“傾聴愛”（listening love）の法則を実際に試みたのでした。愛の決定的な特質のひとつは，愛は敏感に耳をかたむけ，そして内発的に応答するところにあります。私の古い友人であるマックス・ベルトハイマー（Max Wertheimer）が指摘していますように，状況は声なき声をもっているのです。彼は“事物は呼びかけている”とよく言っていましたが，しかしまた，最も強く呼びかけているのは状

況なのです。あるひとつの状況の呼びかけこそが，私たちがこれまで無視しようとしてもできなかったものであり，そしてまた自助会の設立へと私たちをかりたてたものでした。そしてこのようなことが起ったのは，私たちの設立当初だけではありません。その後もくりかえして私たちは敏感に耳をかたむけ，そして内発的に応答しなければならなかったのです。ある状況の下にあって，私たちは十分に敏感でなかったり，また十分に内発的に応答しなかったりしたことを確かにありましたが，しかし傾聴愛は私共のソーシャル・ワークの哲学の基本的原則でありました。

ソーシャル・ワークは諸個人に関心を向けています。ソーシャル・ワークのなかで最も具体的，それゆえ最も重要な代表者はケースワーカーですが，個人との関係において全体的組織に妥当したことは，ケースワーカーにも妥当します。またケースワーカーは敏感に傾聴し，また内発的に応答しなければなりません。しかし彼は個人に出会うなかで，ケア（care）を支配（control）に変えてしまうといったごく当然な誘惑にさらされます。ケースワーカーは傾聴するのではなく押しつけてしまい，内発的に応答するのではなく機械的にふるまう，といった危険にさらされているのであります。ソーシャル・ワーカーであれば誰れでもこの危険をよく承知しているのですが，しかし自分自身がすでにこの誘惑のなかに陥ちこんでいることに気づかない場合があります。ソーシャル・ワーカーはこのことに厳しい審判を下すべきではありませんが，しかしソーシャル・ワーカーは，ソーシャル・ワークを実際に行っている人々に見られるこのような硬直化のメカニズムを乗りこえるために，“傾聴愛”の原則を時々，思いおこさねばなりません。

私がお話ししている危険性とは，他者をいつも扱う際に，彼等を客体として，また支配したり管理する物として扱ってしまう傾向性を指しています。私にとっていつも象徴的なのは，ソーシャル・ワーカーの患者が“ケース”と呼ばれていることでした。ケースという用語にかえて，もっと適切な言葉を見つけだすことができるかどうか，私には分りませんが，“ケース”という言葉は，すぐに個人を何か一般的なものにたいするひとつのサンプルにしたててしまいます。一体，誰れがケースとなることを望みましょうか。しかし私たちはみな，医者，カウンセラー，弁護士，そして同じようにソーシャル・ワーカーにとってもケースなのです。このような不可避的な状況にたいして，ソーシャル・ワーカーは批難されるべきではありませんが，しかし患者つまりケースを扱う時に，患者を自由を奪われ，自発性を抑圧されたひとつの客体としてしまうならば，批難されなければなりません。問題はケースワーカーが患者に他のケースとの類似性，ないしはこれまでの他の患者に経験してきたものとの同一性ばかりでなく，ケースワーカーが患者の自由に根ざすところの非類似性，独自性をも見いだすかどうかであります。ここで決定的なことは，

ソーシャル・ワーカーと患者とのあいだの愛 ― 傾聴し，応答し，変容をもたらしていく愛 ― の大きさなのです。

私は前に使用しているように，ここで愛という言葉を使用する時，明らかに感情としての愛の意味ではありません。つまり，フィリア（*philia*）― ソーシャル・ワーカーと患者とのあいだにのみ真に芽ばえる友愛 ― でもなく，患者にたいする感情的な欲望をもたらすところの，そして多くの場合，創造的であるよりも破壊的であるようなエロス（*Eros*）の意味でもありません。むしろ，ギリシャ語でアガペ（*agape*），ラテン語でカリタス（*caritas*）と呼ばれているような愛 ― 不幸，醜くさ，罪を高めるために，そこに降りていくような愛 ― なのです。この愛は受容的であると同時に批判的であります。そしてこの愛は，愛の対象を変えることができます。これはラテン語でカリタス（*caritas*）と呼ばれますが，しかしカリタスは同じ語の英語の語形が意味しているもの ― あいまいで，ゆがめられた意味をもつ多くの言葉のひとつである，いわゆる慈善（charity）― と混同してはなりません。慈善はソーシャル・ワークとよく同一視されますが，しかし“慈善”という言葉は，愛の要請から逃避するために善行を施す，という意味を含んでいます。愛からの逃避としての慈善は，ソーシャル・ワークの戯画であり，ソーシャル・ワークを歪曲するものであります。

批判的な愛 ― これは同時に相手を受容し，変えていくものなのですが ― は，愛の対象としての人間についての知識を必要といたします。ソーシャル・ワーカーは患者を知らなければなりません。しかしながら，患者を知るには2つの異なる方法があります。ひとつは物としての他者に関する知識，そして他のひとつは人としての他者に関する知識，に区別できます。第1の方法はある人についての外部的な諸事実についての認識であり，第2は可能な限り他者に関与（participate）しながら，他者の内的自己にかかわるという方法です。第1の方法は距離をおいた，経験的なアプローチを通してなされます。第2の方法は他者の内的自己に関与することを通してなされます。第1の方法は必要ではありますが，人間関係においてそれだけでは決して十分ではありません。第2の方法は真の知識を与えてくれますが，しかしそれは愛の直観にのみ賦与されております。ここでソーシャル・ワーカーは人間相互の日常的な出会いという，私たちすべてがおかれている状況のなかにいるわけであります。人間相互についての事実に関する知識がどんなに豊富でも，愛の直観 ― たとえ審判を下しても愛であるところの ― にとってかわることはできません。

人間理解のひとつの洗練された経験的方法として，深層心理学があります。その深層心理学というこの言葉自体が，対象に関する知識以上のものを目指しているこ

と，人を人として理解しようとしていること，しかし人間存在の力動性の分析という手段によって，これらのことを行おうとしていることを示しています。それは2つの方法を統合する方法である，といえるかもしれません。これら両方からは，過去においても今日においても，批判が投げかけられていること，しかしまた他の諸分野と同じようにソーシャル・ワークの分野においても，深層心理学は大変，有効なものとして熱心にとり入れられたことはうなづけるわけであります。かつてこのことは，たびたびソーシャル・ワーカーをディレッタントの精神分析家にしてしまいましたが，同じように宗教と心理学的カウンセリングにかかわる聖職者も，自らを小さな精神分析家にしたててしまうという危険性のなかにおかれております。私はこのような態度に反対して過去30年間，自分の神学生にたいして警告しつづけて参りました。

しかし深層心理学には2つの危険性があります。すなわち，図式主義（schematism）と教条主義（dogmatism）という危険性であります。それは相対的な妥当性しかもたず，部分的にしか適用できない枠組にしたがって，分析対象を判断します。またそれはさまざまな心理療法の学派の学説に依拠し，それも通常はさまざまな学説のなかのひとつにもとづいて判断しようとします。最良の分析家ならよく知っていますように，相互性による個人的な関与 ── このことは直観的な愛を意味しますが ── は絶対的に不可欠なのです。精神分析的な事柄がどんなに洗練されたとしても，他者の中の内的自己との交わり（communion）という一点をもたなければ，すべての方法は結局，役立ちません。分析は非常に洗練された道具ですが，その道具を使用する過程において目的を見失うという危険性はないとはいえません。

以上のことはソーシャル・ワークの目的，目標という最後の，そして恐らく最も重要な問題へと導きます。ソーシャル・ワークの目標はいくつかの段階をもっています。最初の段階は，当面の必要性を充足することですが，ここでは迅速さという要素が重要であります。ソーシャル・ワーカーはその結果として起りうる間違い ── 例え援助を受ける資格のない人を援助したとしても ── を受けいれ，またそれに耐えていくことを引受けねばなりません。このことはひとりの無実の人を有罪にするよりも，何人かの罪人を取逃がす方が良い，という愛の原則とよく類似しております。第2の段階の目標とは，人々を自立へと導くことによって可能な限り社会的援助への依存を自ら廃棄し，自ら克服することに向けられます。このことはあらゆる社会福祉機関においていつも試みられていることですが，この目標の達成が必ずしも容易でないことは私共もよく承知しております。次に第3の段階の目標ですが，これについては少しく述べたいと思います。すべての大学で学んでいる若者，またその他の多くの人々のなかに見られる現在の状況にもとづいて，私たちはこの

時代の人々に，自己が存在することの必要感（the feeling of being neccessary）を与えることが非常に必要だと思います。

自己が存在することの必要性は，むろん絶対的なものではなく相対的なものであります。それにもかかわらず，自分の存在は必要とされていないのだと感じている人々，自分はお荷物にすぎないと感じている人々，は深い絶望の淵に立っているのです。私はあらゆる集団のなかに，この自己の存在の不必要感のはびこっているのを見ました。このような結果を招いた理由は多くありますが，その理由のひとつは，今日の世俗化された社会にあってひとつの事柄が見失われていること，いいかえると，人々をとりまく外的運命がどのようなものであれ，人々はもはや永遠的なものへの志向性（eternal orientation）— 空間と時間から超越した志向性 — を喪失しているということであります。永遠的なるものへの志向性とは，人類全体のなかにあって必要にして無比な，かつ独自な場を所有しているという感覚であります。国から追い立てられた何百万人にものぼる移住者にとって，ここにひとつの危険が横たわっているのであります。すなわち全体としての自分たちの存在がもはや必要とされていないのだ，と感じることは，人類それ自体にとって危険であります。私たちが今日，集団自殺を政治的にもてあそんでいるという安易なやり方は，自分の仕事や自分のコミュニティにおいて，さらには全世界において，必要とされる場を所有しているという感覚を喪失した諸個人の現象とよく類似しております。

このことはソーシャル・ワークの最後の目標に導きます。個々人が自分自身が必要とされていると考えることができる場を見いだすように援助することによって，人間の，また世界の究極的な目的，つまり存在それ自身の目的がコミュニティの普遍的な目的そのものとなるような，そのような普遍的なコミュニティの実現に手助けしているのです。これはソーシャル・ワークの最高原則であり，むろんソーシャル・ワークの技術の限界を超えるものであります。日々の仕事の重荷を担っている人々にとって，この目標は必ずしも意識されているとはいえませんが，このことはもっともなことでもあります。しかしその反面，私たちが助けたかもしれない多くの人々の中のひとりからの応答を聴いて喜びを味う時，その目標は私たちに霊的な高まりを与えることでしょう。存在それ自身の究極的目的に私たちはささやかな方法で — そして個々人の方法はいつもささやかですが — 貢献しているのだ，と考えることは，私たちにとって励ましとなり得ましょう。またこのような励ましを与えることは，今日のような記念のひとときのひとつの役目と言えましょう。

On the Social Worker

——Toward a Philosophical Base ——

Jiro MATSUI

The purpose of this paper is to consider the following points.

(1) The personal style of the social worker is very important in social work practice.

(2) The style of the social worker can be divided into three major variables: observing self, sentience and the role. The three are, of course, separated only for analysis (H. Goldstein).

(3) The three variables are integrated into a functional whole and considered as a system. The stable and patterned transactions of the three variables constitute the style of the social worker.

(4) The style has a property which is not easily changed, but these three variables do not operate within a closed system. They are of a communicational feedback system.

(5) The role, one of the three variables, constitutes the core of the worker's style, but in the past, the role of social worker was ambiguous.

(6) The observing self and sentience add human texure and quality to the helping process. Paul Tillich, in "The Philosophyof Social Work" is full of suggestions for ways to consider these two variables. Paul Tillich's "The Philosophy of Social Work" is thanslated into Japanese in this paper as an anappendix.